読書への誘い

＜第Ⅲ期　第 18 号＞通巻１１３号

2004/10

１０月も、下旬となりました。今年は台風の到来が多かったですね。この前のもので日本上陸が十本目だとか。そしてもう一つ、沖縄に近づいています。その上、越中地震。平穏な暮らしのありがたさを感じる今日この頃です。

新しい刃

安西　均

むすこが　たどたどしい手つきで
新しいカミソリを使っている
初めておとなに変装するので
儀式かなんぞのように両肘を張って
気むずかしく脇目もふりません
こめかみに　小鳥の舌ほどの血が
拭いても拭いても垂れるので
ちょっと　びっくりしています
彼の内部で何が傷ついたのでしょう
はだかの背が　皮のむけた樹の幹みたいに
まぶしく濡れています
むすこには聞こえないようですが
その若い幹のあたりで
小鳥たちがいっせいに　さえずっています
彼には見えないようですが
鏡の中では潮がうねっています

『あたりまえだけど、とても大切なこと—子どものためのルールブック—』

（ロン・クラーク著・草思社・2004年刊）

人間の生き方、他者との関わり方、人生の楽しみ方に関する、初めてのルール集。一見、「そんなのあたりまえ！」と思えることを、多くの子が今、誰からも教わっていない。著者は、アメリカで最も人気の高い小学校教師。さて、どんなルールが展開されるのでしょう？

私の祖母は身長わずか百五十センチだったが、腰に両手を当てて立つと、同じ部屋の誰よりも大きく見えた。不愉快な態度を目にしたら絶対に容赦しない、正真正銘のレディで、みなに尊敬されていた。

私が子どもの頃、祖母は私たち家族と一緒に暮らしていて、成長途上の私に強烈な影響を与えた。私がこれから説明する「５０のルール」に深い思い入れをもち、受け持ちの子どもたちだけでなくすべての人の紹介したいと思ったのは、ひとつには祖母の存在があったからだ。

祖母は、両親と歩調を合わせて、他者に対する尊敬の念と感謝の気持ちを持つことや、きちんとした礼儀作法を私に植え付けた。さらに、どうすれば人生を楽しみ、チャンスを活かし、一瞬一瞬を最大限に生きられるかも教えてくれた。幸運なことに私は、人生をただ漫然と生きるのではなく、いかに生きるべきかを教えてくれる、すぐれた手本となる家族に囲まれて育ったのだ。

だが、私が教師になった時、多くの子どもたちが、すぐれた導き手や機会に恵まれていないことに気づかされた。そこで、私自身が彼らの手本となり、ロールモデルになろうと努めてきた。子どもたちに、人生をどのように生き、どのように楽しむかを教えたいと思ったのだ。

そのための要点、あるいは指針を与えたくて、このルール集をまとめた。最初はほんの五つだったルールが、年月とともにハンドブックにまとめられるまでに増え、それにつれて子どもたちの言動や勉強態度に変化があらわれ、同時に他者を敬う心が育ち始めた。

しかしこのルールは、なにも子どもたちだけのためにあるのではない。むしろ、その大部分は、どんな人にも——若者にも老人にも、家庭の主婦にも医師にも、政治家にもウェイターにも、そしてそれ以外のすべての人にも当てはまるものと考えている。どのルールも、人間の生き方、他者との関わり方、人生の楽しみ方についてのもので、したがって、すべての人に関係するものだからだ。

私は子どもたちとじかに向きあいながら、現在のかたちの「５０のルール」を完成させることができた。私が受けたしつけとこれまでの人生で得た教訓とを合わせて発展させ、子どもたちが秩序を維持しながら能力をのばすために必要なルールを追加したのだ。

ただしこれらは、子どもたちの品行を正すことだけを目的にしているわけではない。彼らが私のクラスを巣立ったあとに直面するであろうさまざまなできごとや状況に、自信を持って対処できるよう、その備えとしてつくられたものでもある。

学年の第一日目からこれらのルールを説明し、練習させ、きちんと守るように指導していけば、一年後にはきっと、彼らをどんなところにも連れてゆけるだろうし、いかなる状況にも置くことができ、どんな経験でもさせられるだろう。なぜなら、彼らはいまや学ぶ準備ができていて、人生の体験を切望しているのだから。

いまでこそ、私は教師でない自分の姿を想像することができないが、それは人生の皮肉でもある。なぜなら私は、どんなことがあっても教師にだけはなりたくない、ずっと思っていたのだから。

学校時代はさまざまな野望に胸をふくらませていた。エジプトに行って古代墳墓を発見しようと思ったこともあれば、ジャーナリストになって世界を舞台に活躍しようと思ったこともある。諜報部員としてスパイ活動をしようと思ったこともある。教師のような「退屈で」「刺激がなくて」「つまらない」仕事をしたいとは夢にも思っていなかった。

ハイスクール最終学年のある日、私は両親の前に座り、大学進学について相談をした。両親は勤勉に働く人たちだったが、私の学費が家計の重圧になるのは目に見えていた。「おまえはそんなことを心配しなくていい、ロン。子どもの教育は親の責任だ。おまえはいい成績を取ることに集中しろ」と父が言ったのを憶えている。両親の気持ちはありがたかったが、よけいな負担をかけるのはいやだった。

そんなときに、「教員養成奨学金制度」のことを耳にした。大学卒業後の四年間、ノースカロライナ州内の学校で教えることを条件に、学費を全額貸与するという制度だ。依然として教師になろうとは思っていなかったが、その奨学金をもらえれば、わが家の家計が大いに助かるのはわかっていた。だから、奨学金を受けることにした。ただし卒業しても教師になるつもりはなかった。受けた奨学金は、稼ぎのいい仕事に就いて返せばいいと思っていたのだ。いま思えば、けっしてほめられた考え方とはいえない。けれども、当時はそれで筋は通っていると考えていた。

（pp.11-14）